

手話だから熱く語れる

耳の聞こえない子どもたちに、すべての授業を手話で行うろう学校が東京にあります。TBS記者だった斉藤道雄さん(63)が校長を務める私立明晴学園です。実は、手話だけで教える学校は日本でここだけ。生き生きと「会話」する子どもたちの姿を撮った写真集「写真II」が出版されました。(山内深紗子)



きみはきみだ

斉藤 道雄 著

東京・私立明晴学園

授業に「口話法」使わず

東京都品川区。廃校となった小学校の校舎に明晴学園はある。3歳から14歳まで、43人のろうの子もたちが通う。他のろう学校と大きく違うのが、授業に唇の動きを読み取る「口話法」

を使っていない点だ。

2階の職員室。22人の先生のうち12人がろう者だ。お互いの顔や手が見えるよう、四角形に向き合って座っている。唯一、電話のある席に座るのが校長の斉藤道雄さんだ。

手話の世界と出会ったのは、TBSのワシントン特派員だった1993年秋。友人の誘いで、ろう者のための総合大学を訪れた。

無声映画のような静けさを想像していた。だが現実は大違い。教室、カフェテリア、散歩道。あらゆる所で手を大きく使い、意思を伝え合う学生たちの熱気あふれる姿があった。「豊かなさめき」を感じた。

帰国後、日本のろう教育について取材すると、手話ではなく口話法が長く

学園の生徒たちに囲まれる斉藤道雄さん(中央) 東京都品川区、高波淳撮影

「きみはきみだ」生き生き 写真集に



日本のろう教育と手話

1880年のろう教育国際会議で、手話よりも口話法が優れていると決議されたのを受け、日本のろう学校でも口話法が主流になった。手話は日本語習得の妨げになるとして、多くの学校で禁止された。1990年代に見直し機運が高まり、国も多様なコミュニケーション手段のひとつとして手話を位置づけた。国際的には06年、国連障害者権利条約が「手話は言語」と明記。90を超える国が批准し、法律で手話を公的言語と定めた国もある。国内でも、手話を法律で言語と定める手話言語法(仮称)を作ろうという動きが出ている。



料理メモ

カキと白菜の
土鍋煮込み



1人前約210kcal、塩分2.3g

主流だったことを知った。「手話という自然な言語があるのに、これでは両足を縛られたまま走れと言われているようなもの。聞こえることが当たり前とされる社会で、少しでも聞こえる子に近づこうとしている限り、ろう児は自分の主人公になれないと思った」

90年代、日本でも、ろう者を「耳の聞こえない人」という身体的特徴ではなく、「手話という言葉を使う人たち」という文化的存在としてとらえる人たちが現れた。この学校の前身であるフリースクールが設立され、2008年に学校法人となったのを機に、校長に迎えられた。

学園の最大の特徴は、「第一言語(母語)として手話を身につけ、第二言語として読み書きの日本語を学ぶバイリンガル教育だ」という。授業で使うのは、日本語の単語と手の動きを1対1で対応させた「日本語対応手話」ではなく、ろう者の間で昔から使われてきた「日本手話」だ。日本手話の授業もあり、より高度な思考力を養う。写真集「きみはきみだ」は、斉藤さん

自らが目撃する子どもたちの様子を撮りためたものだ。学級会議、休み時間の廊下、台風の話を手話でする子どもたち……。約1万5千枚から約40枚を選び、語りかけるような文章をつけた。例えば6月、上級生が先生役になる授業のひとつ。

おおせいの友だちといっしょにいても きみはきみだ 世界にたったひとり きみであることのできる人は きみしかない だれもきみのかわりにはなれない それが、きみはきみだということだ

伝えたかったのは、「手話という自らの言葉を使い、その生き方に納得し、周囲にも『きみはきみだ』と認められた時、自分の人生の主人公になれる」ということ。「自分らしく生きるようになった子どもたちの顔を見て、何か感じてもらえればうれしい」 A4判変型。32頁。1600円(税別)。問い合わせは、子どもの未来社(03・3511・7433)へ。